



第141号

2024年10月15日発行

千葉大学教育学部
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33

これからの同窓会

同窓会会長 八木雅之

(S 44・3卒)



二年前(令和四年)、母校の創立百五十周年記念事業が多くの同窓生の支援を受けて無事終了した。同窓会は、新たな歴史を創るべく、第一歩を踏み出すことになる。そんな中での会長拝命、仲間の支えを頼りとして緊張感をもって、職務にあたらねばなるまい。身に余る役割だが、思いの丈を述べてみたい。

まず、挙げたいことは、同窓会の基盤でもある支部活動の充実・強化である。歴代会長も掲げておられるが、支部あつての本部なのだ。同窓生は当然のことながら各支部に所属し互いに支え合っているが、本学は他県の大学とは様相を異にする一面がある。それは他県出身者の割合が高いことだ。昔のことになるが、小生の同期は三分の二が他県出身者だった。ちなみに、令和五年度のデータを見ても、約六割に及ぶ(学務課調べ)。当然のことながら、他県出身者が本県で教壇に立つ割合も

高い。母校のお膝元に就職してくださった仲間に支部の存在は大きな力となっているはずだ。活動を活性化させるための物心両面にわたる支援を一層充実させていきたい。もちろん、地元に戻られ、それぞれの地域で中心となって頑張る仲間たちも多い。そのような仲間たちとの連携についても検討していきたいと思う。

二つ目は、同窓会の存在感を高める活動である。現在最も力を入れているのは、後進の教員採用選考に関わる「教職サポートルーム相談事業」である。相談員は退職された同窓生なので現場を知り尽くしており、力強いアドバイスができる。親身になって対応してくださるので相談者も安心だ。結果は数値が示している。昨年度の相談者数は延べ一四〇名に及び、相談者の九十パーセントが合格している。加えて、教員志願者向けに行っている「教員採用選考試験対策ガイダンス」「教員採

紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいきだより	4・5面
私の学園生活	7面
趣味アラカルト	8面
講義の窓から	8面
海外教育施設から	9面
近年の卒業生の動向	9面
定期総会	10面
功労者・永年勤続者の紹介	10面
令和六年度の経常予算	10面
受賞者からのメッセージ	11面
事務局より	12面
物故会員	12面
編集後記	12面

用選考試験対策セミナー」「教員採用選考試験合格者体験発表会」この三事業についても周知をしていく。また、三年生に限らず二・四年生・大学院生向けに行っていることについても周知を図り、連続した支援活動にしたい。同窓会としては、今後も相談員の増員、相談日数の拡大等、前向きな姿勢で後進の育成に努めていきたい。三つ目に挙げたいことは、広報活動の充実だ。現在の同窓会報がカラー化して九年、確固とした編集方針の下、充実した内容が定着し、さらに進化を遂げている。多くの会員に愛読されその評価も高い。会報を開けば、卒業から何年経っても現在の母校の様子が目の前に広がる。同じ部活で汗を流した仲間の原稿に懐かしさがよみがえる。後進の意欲溢れる文章にエールを送りたくなる。特別寄稿の記事を読めば活躍する仲間の存在を誇りに思う。同窓生の感性あふれる美術作品に思わず目を見張る。人事や慶弔の知らせに時の流れをしみじみ思う。いろいろな観点に立って読むことのできる我々の会報

は、同窓会員にとって欠かせぬ存在となっている。以前も記したことだが、同窓会とは「同じ学校の出身者が集まった組織。また、その会合(広辞苑)である。同じ学び舎で学んだ者同士がなぜ集まるのか、原点に立って考える」と答えが出てくる。あの西千葉の緑濃いキャンパス、教授の難解な講話、講義をさぼっての学食のランチ、しどろもどろの教育実習、自分でもよくわからない卒論、仲間と出かけたハイキング等々、一つぐらいいは「そうだった」と頷く自分があるはずだ。それでいいのだ。

表題に対して軽薄な内容となっていることは承知している。今の自分にはこれで精いっぱい、気楽に足を運べる同窓会でありたい。



現役若手教員による教員養成講座

やってみることの重要性



島山 隆 朗

(H28・3卒)

私は現在、中高併設型一貫校に勤務し、社会科の授業を担当している。教職に就いて九年目を迎える。気持ちはまだまだ若手であるが、研修等では「中堅」と呼ばれる存在になった。実際に、業務において、以前では考えなかったことを考えるようになった。

一つ目は、授業の展開の仕方である。私がこれまで受けてきた授業は講義形式の授業が多く、いかに話す力があるかということが重要であり、私も教材研究を行う中でしっかりと説明できるかということに重きをおいてきた。しかし、ICTが普及し、自分でさまざまなことを検索できるようになった今、どのようなことを授業で伝えるべきなのかを模索している。その中で取り入れているのが、課題発見と課題解決である。課題発見は教科書や授業内容に対して疑問を持つことである。この疑問を持つことが興味関心や知的

好奇心につながると考える。そして、その疑問を自ら解決していく、課題解決をすることで、講義形式では理解が難しかったことや踏み込んだ内容にまでふれることができるようになり、それを協働すること

で言語活動にもつながる。二つ目は学校運営についてである。これまではさまざまなことを踏襲して行うことが多かったが、本当に子供たちのためになることはどのようなことなのかという視点に立ち、意見を出したり、新しいことに取り組んだりするようになった。これまでの経験と生徒目線でも物事を考えられる年代ということが強みであり、熱量をかけただけ生徒に還元されるため、体が動く時期というのには積極的に行動に出るべきだと考えるようになった。

教員の仕事について、メディアでもさまざまな取り上げられているが、子供たちと自分自身の成長を感じられる魅力的な職業であると思う。いずれの成長のためにもさまざまなことに挑戦し続けていきたい。

学校現場から、

やる気を引き出す学校づくり



松藤 有 里

(H2・3卒
野田市)

やる気みなぎる「楽しい」学校。私が校長として目指す学校像である。現在、児童のみならず職員に浸透させるべく、校内のあちこちにこの言葉を掲示している。

教員の出发点であった学校に新任校長として着任した昨年度は、この縁に喜びを感じながら創立百五十周年行事を実施するうちに、あつという間に過ぎた。

その一年目、最初の管内校長会議で、新任校長を代表して挨拶する機会をいただいた。「学校を取り巻く状況は

厳しいものがあるが、学校は本来とても楽しい場所であるはず。校長自ら学校は楽しい場所だということ積極的に示し、魅力ある学校づくりに取り組んでいきたい」と先輩方の前で決意を述べた。その際、ある先輩から「言ったからにはやらないといけないね」と厳

しくも温かい言葉をかけられ、自身のモチベーションとなったことを思い出す。

ここで現在進行形の本校の取組から二点紹介したい。

一つ目は、職員同士が高め合う形で授業力向上を目指す研修体制作りである。職員が授業を楽しんでいなければ児童が楽しいと思える訳がない。そこで、若年層を中心に授業についてざくばらんに語り合う場を設けている。教員の多忙化は大きな課題であるが、授業力を向上させたいと自主的に授業公開し、集まってくる職員の雰囲気は大事にしたい。

二つ目は、児童の実態に寄り添って学習形態を工夫する等の指導体制作りである。空き教室を活用したスタディルームでは、市費負担講師が昼休み等に常駐し個別指導を行っている。また、低学年の間割にスタディタイムを位置付けて補習を行い、わかる楽しさを実感できる学習支援に努めている。

職員の「やる気」が児童の「やる気」に繋がることを日々実感している。目指す学校像を合言葉にさらに教育活動を充実させていきたい。

大胆な見直しを



酒井 (植草) 純

(S 61・3卒)

安房地方

退職して二年目になる。現在、保健所で家庭相談員として勤務している。仕事柄、虐待を受けた子供たちの情報や支援が必要な家庭の話なども耳に入る。

現職の時には、自分の学校のことは気になっても、周囲のことは気にしていなかった。しかし、実際にはたくさんの子供たちが保護や支援を必要としている。その多さには驚くばかりだ。そうした子供たちも学校に通っている。あるいは通いたくても通えないでいる。現場の教職員は、さまざまな背景を持つ子供たちと日々向き合っている。悩んで、思うようにならないながらも奮闘している。頭の下がる思いである。

教育現場の働き方改革が叫ばれて久しい。「子供のためなら」と、頑張る人が多く、保護者や地域も学校にそれを求めている。

しかし、教職員や学校は万能ではない。新しい教育内容や評価方

法等も次々にくる。中学校の部活動もそのあり方が問われている。

今こそ、学校や教職員が「やるべきこと」、「やれること」を明確にし、捨てるべきは捨てるタイミングではないか。コロナ禍を経て学校はだいぶ様変わりした。それでも教職員の多くは、自分が育てられた時代に影響を受けながら努力している。保護者や地域も自分が育った時代を引きずっている。また、大きな変化は不安定さを生む恐れもある。

今年の教職員採用選考では志願倍率がさらに下がったと聞いた。このままでは教職員を取り巻く環境はますます先細りになりそうだ。子供たちが「わかった」、「できた」、「仲間と一緒にやり遂げた」そうした時にみせる飾り気のない笑顔や目の輝き、充実した表情に多くの教職員は力をもらって頑張ってきた。

子供が減少し、若者が減少し、世の中の多くの業種が人手不足になっている。現状を直視し、教職員本来の役割に笑顔で臨める現場になってほしいと切に望む。

学校現場へ、

不登校児童生徒への教育支援



根本 厚

(S 59・3卒)

千葉市

令和五年三月に学校を退職し、千葉市教育支援センターである「ライトポート美浜」でチーフ指導員として働いている。

「ライトポート」とは、千葉市教育センターが所管している教育支援センターの通称である。ここでは千葉市内の不登校児童生徒に対して個別のカウンセリングや体験的な活動、個に応じた学習指導などを通して、集団生活への適応力や将来の社会的自立のための力を養うことを目的としてさまざまな活動に取り組んでいる。

このライトポートの始まりは平成十五年であり、その後も順次開設され、現在は市内の各区に一つずつの計六つのライトポートがある。ここで働く職員は「指導員」といい、チーフ指導員については退職校長が担っている。また指導員以外にも、千葉大学教育学部のインターシップ研修生として、数名の学生たちが年間を通して活動

している。

現在の「ライトポート美浜」には、小中学生合わせて四十五人が在籍しており、子供たちは指導員や学生たちと一緒に日々さまざまな活動に取り組んでいる。

また教育センターでは、文化祭や運動会、宿泊キャンプなどすべての教育支援センター合同の行事も数多く行っている。本番はもちろんのこと、準備や練習への取り組みなどを通して子供たちは大いに成長している。見学に訪れた保護者や学校関係者からは「今までに見たことがない表情や姿で感激した」などの言葉をいただくことも多い。

学校の復帰も含めて子供たちが次への一歩を踏み出し成長していくためには、在籍校の積極的な関わりが欠かせない。時々、先生方が見学に来て生徒と話をしたり、指導員と情報交換をしたり、学習効果などを積極的に評価したり……。子供たちもそれを望んでいる。今後とも、子供を中心にして、在籍校との連携を密に取っていききたい。



バトンをつないで



中嶋 のり子

(S 58・3卒
千葉市)

教育学部を卒業し、地元千葉市で教員生活を送り四十二年。今私は、縁あって東京の大学で教師を目指す学生たちの指導に当たっている。大学で学んだこと、上司や先輩から学んだこと、そして、自身の実体験を踏まえながら教師候補を育てるお手伝いをする役割を担っていることに、やりがいと責任を感じているところである。学生たちに伝えたいことは山ほどあるが、繰り返し伝えていることが二つある。

一つは、授業力をつけるということである。授業で勝負できる教師は、時代が変わろうとも、求められ続ける教育の不易の姿と考える。教師は「わかった」「できた」と子供たちが実感できる授業になるように、興味を持つ素材を提示し、「なぜだろう」「解いてみたい」「やってみよう」と、意欲を持たせて授業をスタートさせることが大切だということ等を伝えている。

もう一つは、「感謝の気持ちを忘れない」ということである。「おかげ様」という言葉の由来を話し、「上司のみならず、養護教諭、栄養教諭、事務職員の方、技能員の方がそれぞれの立場で支えてくれているということを忘れずに行動できるとき、その方々はきつと皆さんの大きな力になってくれます」と、自身の経験をもとに伝えている。

人数としては多くないが、今年も六名の教え子が千葉県の教師になった。先日、偶然会ったそのうちの一人が「先生、子供たちが本当にかわいいです」と、嬉しそうに話してくれた。

常に子供を慈しみ、前述の二点を時々思い出しながら、教師として成長してくれること、私が先輩からいただいた大切なバトンを、彼らがまた次の世代につないでいってくれることを願っている。



明るく前向きに生きる



井上 久

(S 60・3卒
市原市)

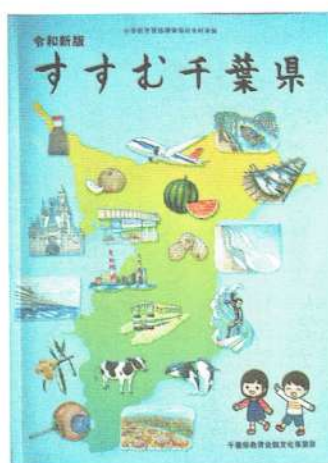
三十七間の教員生活が無事に終え、退職後は、今までお世話になった方々への恩返しのためにも、自分なりに生きている。

まずは、いちばん感謝している家族のためにできることに励んでいる。家の木の剪定・伐採や畑の草刈りなどをする時間も増え、少しは家族の役に立っている気がする。時々来る孫の世話は、何にも代えがたいほど楽しい。今後は、更に行き先を増やし、家族の一員として貢献していきたい。

家庭の事情で「地域デビュー」は早く、さまざまな役をさせていだいた。ただ、町会長だけは退職まで待っていた。令和四年四月から二年間引き受けた。現職の時は教育委員会に行くことが多かったが、今回は危機管理課や道路維持課などにお世話になった。町会長は終わったが、今も様々な役を引き受けている。

退職後は再任用で初任者指導や社会科専科をしている。初任者に

見せる「実演授業」が気持ちよい緊張感を維持させてくれる。また、昨年は自分の専門の社会科専科として勤務できたことに満足している。校長という職を離れ、一教員として授業ができることにやりがいを感じている。今年は四人の初任者の指導をしている。もうしばらく大好きな学校に関わりたい。社会科副読本として県内の多くの四年生が使用している「すすむ千葉県」の執筆・編集は、今も継続している。大好きな社会科の勉強が続けられるので、少しでも良いものにしたい。



これからも、家庭・地域・そして学校で、自分なりに生きていくと思う。それが、どこかで誰かの役に立ってくれたら、今までの恩返しになると信じている。一度きりの人生なので、あまり考えすぎずに、自分なりに、明るく前向きに生きていきたい。

やりたいことを続けて



谷田部 幸子

(S58・3卒
松戸市)

縁があつて、定年までの九年間に教育委員会、小学校の教頭、校長を経験させていただいた。見なかったはずの世界を見ることがとなり、苦労はしたが代え難い経験となった。その後、再度子供に教えたいたい思いが強かったので中学校に戻り、再任用フルタイム勤務の教諭として五年目を迎えている。

最近、毎回授業から戻る度に「あー、楽しかった!!」と思つて過ごしている。子供たちの一所懸命な姿を見たり、驚くような意見、すばらしい発表が成されたりした時、私にとって至福の時間となっている。今の私の使命は二つあると考えている。

一つ目は授業を通して子供たちに社会科を大好きにさせること、そのために、学力向上を図る地道な取り組みと生徒の活動を重視した授業を行っている。自分の考えを持ち、意見を表明できる子供を育てたい。

いきいきだより

二つ目は、若い教員を対象に週に二回程度行っている七時間目の授業である。ここでは、何をどのように考え、教えたらいいか議論の時間を作るようにしている。「最近社会科を教えるのが楽しくなりました」という本人の意見や上司が見ても目に見えて授業力が向上しているという話も聞き、嬉しい気持ちでいっぱいである。

現在、演劇部顧問もしている。昨年度は三百人入る市民劇場を借りて、卒部公演を実施した。中学生が借りるのは初めてとのことであったが、二百五十人以上が集まり、多くの人からお褒めの言葉をいただいた。今年はさらに新しいものに挑戦。ミュージカルである。どの位のレベルまで表現できるのか今から私自身とても楽しみである。子供たちは私たちの予想をいつも軽く越えてくるのだから。

人生、六十五となる今もやりたいことを続けて、新しいことに挑戦し続けている。これが最後かもしれないと思つと止められずに全力でぶつかる日々を過ごしている。ぶつかれることに感謝!!である。

さて、来年は何をしていることだろう。

気ままに、ズボラに



本村 洋司

(S58・3卒
富津市)

定年退職後四回目の夏を迎えた昨今、私は、なかなか自己満足な第二の人生を送っている。

満足①家族第一の生活

ずっと家庭を二の次にしてきた教員生活三十八年間。定年後は、再任用や非常勤講師の職に就くとなく、一分一秒でも長く夫婦で過ごせる道を選ぶと決めていた。互いに持病があるという点も、この選択の要因である。外食やドライブから買い物や通院まで常に一緒に、新婚当時より仲良しである。夫婦円満は、精神衛生的に最高の健康法の一つかもしれない。

満足②ストレスフリー

完全にゼロということはあり得ないが、心身共に過度な負担がない生活ができています。中でも、毎朝好きな時刻に起床してよいという境遇はいちばんの贅沢であり、ドジャースの試合が何時に放送されようと、ライブで好きなだけ観戦することもできる。他人や周

囲からの制約を極力受けず、自分の意のままに生活ができる自由は、とても強力な精神安定剤であると思う。ただし、地域の活動にはなるべく参加するよう心がけ、今は神社の祭礼委員に名を連ねている。

満足③気ままにホビー

生活を潤してくれる趣味として、野菜の栽培、投資とサーフフィッシングがある。わずか三坪の家庭菜園から、キュウリ、なす、ニンニク等をスーパーで買わなくてよいほど収穫している。釣りの釣果は未だゼロ尾。投資はプラマイとんとん程度であり、いずれも、ボケ防止のための頭の体操程度には役立っている。

満足④ズボラにエクササイズ

来年になると、やっと年金の二階部分が支給開始になるので、せいぜい長生きしたいもの。身体の上は足腰から。ズボラな私でも、毎日四十分程度の散歩を励行しているが、暑い夏の腰が痛いのだと理由を付けてはすぐサボる。メーカーの回し者ではないが、私でも続けられるのはドクターエア。通称ブルブル。スイッチを入れて乗るだけ。どうぞお試しを。

特別寄稿



これからの目標

前日本ユニシス実業団バドミントン部総監督
シドニーオリンピックバドミントン団長

阿部 秀夫
(51・3卒)

七十歳で馬主申請をした。金銭面でのハードルが高く、身辺調査も厳格で、失礼な質問も受けた。仕事も辞めて収入もなく、中央競馬会、地方競馬会からの連絡も無く数ヶ月が過ぎたある日、審査合格の通知が届いた。ただし、一年間競走馬を所有していないと、資格が剥奪されるという厳しいものだった。調教師、厩務員、騎手、誰一人知り合いがいないのである。三十年間、会員制の一口馬主には入っていたが、そんなもの馬主でも何でもない。会費を払って、たまに勝つと配当が振り込まれるだけで、権利も資格も無い。馬たちの余後も知らない。鳩レースをやっている高校時代の友人を頼って、レースつながりで、田中博康さんという若手の調教師を紹介してもらった。後日聞いたのだが、トレーニングセンター近くの寿司屋で偶然、一度会っただけの絆らしい。でも、細い線が繋がった。私は、必死でその糸を手繰り寄せた。また、自らも懸命に勉強した。

新馬主の勉強会のため、宮崎の育成牧場に出かけた。そこで、初めて、色川さんという馬主の先輩(友人)ができた。会話の九十%が、私からの質問攻めだ。さぞかし、うっとうしかっただろうが、誠実に答えてくれた。その後もメールやラインで質問攻めをしたり、川崎競馬場まで彼の持馬の応援に行ったりして、付き合いは継続させてもらっている。田中調教師にも質問攻め、お願い攻めで、船橋競馬場の佐藤裕太調教師を紹介してもらった。地方競馬は、少々ハードルが低く、とてもフレンドリーだ。九十九%のアドバイスをもらい、一頭購入し預託調教をお願いしている。先日船橋競馬場でデビューし、うれし



い一着。賞金までもらえた。夢はふくらむ。ダービー、有馬記念、凱旋門賞を目指すチーム(仲間)をつくりたい。夢が目標になりつつある。十五年後かな?

話は変わる。四月に栃木県ウエイトリフティング協会会長になった。私には、全く競技経験は無い。繋がりは二つ。パリオリンピックウエイトリフティング監督の高校時代(上尾高校)の担任だった。一九八八年、ソウルオリンピックの時、勤務していた上尾でブルガリア代表チームと直前合宿をやった。会長就任後、毎週末ウエイトリフティングの大会や強化練習に参加して、勉強している。ブリスベン大会(二〇三二年)の次のオリンピック(二〇三六年)で金メダルを狙える人材(中学生)を見つけた。

そう言えば私が高校教師になり、松友・高橋(リオオリンピックバドミントン女子ダブルス 金メダル)に会ったのも、彼女たちが中学生二・三年生の時であった。これも、何かの運命かもしれない。



三十年前、ゴルフを上手になりたくて、プロに個人レッスンをお願いした。その時も半年間質問攻めだった。相手がプロなので、レッスンはきちんと払った。二年後の日経カップ(全日本企業対抗)で、日本一になった。

インターハイチャンピオンを育成できる教員志望で、千葉大学教育学部に入學、卒業。埼玉県で、高校教諭となり、全国優勝全二十一回。その後バドミントンがオリンピック種目になったことがきっかけで、鈴木千秋氏(千葉大学理学部卒)と共に旧日本ユニシスにバドミントン企業チームを立ち上げた。

『夢を目標、そして現実!!』という、座右の銘を成し遂げたのかな?

今から十二、三年前、バドミントンのストリングの開発、販売をする会社を立ち上げた。お陰様で順調に成長し、数年前に故郷である栃木県に工場を移転した。昨年度息子に会社を任せ、少し離れた立場で見守っている。

今は、バドミントン、ゴルフから離れ、馬主、重量挙げ、クルーズ船の旅が、夢から目標になっている。まだまだ、元気で頑張る!!

私の学園生活

私の学園生活

児 安 敬 子

(S 49・3 卒

夷隅地方)



入学した年の五月は安保闘争が激しかった。稲毛に間借りした四畳半の家賃は四千五百円、学生食堂のカレーライスは一皿四十円であった。一年生の時は、教養課程と水俣病のゼミの教室に参加した。

二年生になると音楽の専門科目が始まった。作曲が得意、吹奏楽の経験者、ピアニストの学友の中にあつて、私はピアノが少し弾け、高校入試のために学んだ楽典の知識があるだけだった。

作曲法、指揮法、声楽どれをとっても新しいことばかりだ。

そんな中、私の心を動かししたのは、ドイツ留学から帰り、非常勤講師をしていた新進気鋭の山本敬先生との出会いだ。早朝より並んでレッスンに臨み、響きのある声で、長く歌い続けることのできる発声の体得をめざしていた。呼吸法など今までに学んでこなかったことばかりだ。

ピアノや声楽の練習は、学内の外

れにあるコンクリートのピアノ練習室で行った。終日開いていた。夜遅くまで練習していて、人通りも少ない道が怖くて帰れなくなった学友もいた。

学年が進むにつれ、歌う楽しさもわかってきた。卒業演奏会では、オペラのアリアを二曲歌うことができた。音楽科の先生方とは年齢が近いこともあり、懇親会や旅行を行い和気あいあいの音楽談議に花が咲いた。当時、小澤征爾さんの指揮についての話題が印象に残っている。

卒業後は千葉市に就職。音楽教育の進歩はめざましかった。「気球に乗ってどこまでも」のエイトビートのリズムに苦勞したが、今では考えられないことだ。

平成三年大原中在籍中に、長期研究生として、再び山本敬教授の教えを乞うことになった。その時にNHK全国学校音楽コンクール金賞校を訪問したり、中国からの留学生羅紅さんと鄭宇さんと親交を深めたりした。

今、大学で始めた声楽を学び続ける日々。地域の歌のボランティア活動が私の生きがいになっている。



地理学野外実習の旅

初 谷 幹 夫

(S 44・3 卒

木更津市)



昭和四十年入学。前年には新幹線営業開始、東京オリンピック開催という、そんな時代であった。学部では、畏友八木君(現同窓会長)と出会い、今日まで親しくしていただいている。

四年生の春、彼に誘われて「地理学野外実習」を受講することにした。通常は四単位取得に一年を要するところ、この実習は夏休み一週間でそれが成るといふ魅力的なものであった。

七月十三日、附属小での教育実習を終え、東京駅十四番ホームに集合、十九時五十分発急行「出雲」に乗車。メンバーは、清水馨八郎先生と教育学部生三名、文学部生三名の総勢七名。

沼津から寝台をとる。その料金が九〇〇円。今考えると実に安価であると思うが、領収証が残っているので間違いはない。ついにながら出雲大社宝物拝観料・錦帯橋入橋料・宮島渡船料な



どがいずれも三〇円で、広島平和記念資料館観覧券が二〇円とある。当時の物価水準が偲ばれて感慨深い。

さて実習旅行であるが、福知山の手前の綾部付近で起床。九時前に余部鉄橋を渡る。高さ四一メートル「空中列車」の眺望もあつという間に、九時五〇分鳥取駅着。

鉄道・バス・船舶・タクシー・自転車を利用した実地見学の始まりである。スケジュールは、国鉄ダイヤに詳しい八木君によるもので、大変お世話になった。

砂丘地形、カルスト地形、鍾乳洞など様々な地理的景観を観察しながら先生の野外講義を受ける毎日。広島島の宿では広島大学助教授の訪問を受け、お二人の地理学談議を傍聴する機会に恵まれた。

七月十九日朝、岡山駅で解散となる。八木君とは二人旅を続けることにした。姫路城を訪ねた後、財布の残金を気にしながら二日間京都の寺巡りを楽しんだ。

帰りは新幹線を利用。何を飲食したか覚えはないが、五五〇円也の食堂車領収書が残っている。旅の最後の支出である。



新しく始めたこと



松本 健志

(S57・3卒

習志野市)

数学の教員として中学校に勤務し、さらに再任用勤務を五年続けて退職。興味があった美術について、ユーチューブで作品(実物ではないが)を観たり、美術史の解説を聴いたりする余裕ができたが、ブックオフも楽しい。かつて読んだが、今は手元になく、書店にも置かれていないものを再び手にして、懐かしく読み返している。また、昭和の有名な作家の作品で、今はあま

私の趣味

サッカーに魅せられて



高 仲 輝 夫

(S50・3卒

長生地方)

小学校時代に始めたサッカー、千葉大卒の先生との出会いがきっかけだ。中学・高校さらには大学でもサッカー部に入学した。体育会といっても国立大学なので、セレクションで有望者を採っている訳でもなく、経験者はさまざまでサッカーに魅せられた同士の集まりだった。私の大学生活もますますサッカー一色となった。教員になってからはブレイクの機会は減ったが、指導者としてのかかわりは今も続いている。

目にはしないものを見つけることもできる。安価でいい良書がある。そのような中で、いちばん時間をかけているのは教材づくりである。

一昨年の四月から、中学校を併設する私立高校に非常勤講師としてお世話になっている。メールで生徒に予習の資料を配付したり、逆に生徒から「明日質問に行っていないですか」というメールがきたり、関数グラフや問題を作成するソフトを活用したり、私にとっては、新しい経験である。高校で数学の授業をすることは一つのチャレンジであった。これを趣味としたら語弊があるが、悩みつつ模索することを楽しみも感じる毎日である。



サッカーは「空き地と予測」のゲームだ。空き地を見つけ予測し、ゴールする判断力・想像力が大切だ。また、ボールを持った者が常に主役になれる。そこも魅力の一つだ。

スポーツは目的でなく手段である。人々に「元氣・感動・仲間・成長」をもたらして、心を豊かにする。

ところで、「サッカーは少年を大人にし、大人を紳士にする」は、クラマー氏の名言だ。私は、「紳士」になっているだろうか。



千葉大学教育学部の数学教室では、近年、時代のニーズや教育環境の変化に伴い、定員数が大きく変遷してきました。小学校コースの算数科選修の定員は、一九九四年に四十名から三十名に、二〇〇八年に二十六名に減少し、二〇一九年の学部改組後には現在の定員二十五名となりました。中学校コースの数学科教育分野も同様に、一九九四年には二十名だった定員が二〇一六年には十名となり、現在もその数が維持されています。

千葉大学教育学部
数学教室の歩み

教育学部教授 白 川 健

(現融合理工学府)博士後期課程へ進学した者もおります。その大学院生は、修了後に数学者となり、運よく千葉大学教育学部に就職することができ、現在では大学教員として後進の育成に熱意をもって取り組んでいます。他でも、千葉県教育委員会からの委託研究生や文部科学省の留学生を受け入れ、多くの教員や研究者を輩出しています。

数学教室は研究活動にも積極的で、国内外の教育・研究に携わってきました。特に、二〇一八年には日本数学教育学会第六回春期研究大会が、二〇一九年には第七十四回関東甲信静数学教育研究千葉大会が開催され、教室の松尾七重教授や辻山洋介准教授が中心となって運営に携わりました。また、一九九七年以降、解析学に関する国内会議五件、国際会議六件が千葉大学で開催され、教室の教員がその実行委員長を務めるなど、数学の学術的会合を主催した実績もあります。



ジャカルタ日本人学校(JJS)に赴任して約四カ月になった。インドネシアのジャカルタにあり、約七百名強の児童生徒が在籍している。職員数は、日本人の教諭が、五十八名、英語の教員六名、インドネシア語六名の七十名。それに事務のスタッフ三十名で学校を運営している。さらに幼稚園も併設されている。

朝六時三十分には職員は出勤となる。児童生徒のほとんどは、七時頃に到着するスクールバスで登校してくる。昇降口で待つ職員と児童生徒の「おはようございます」の声が響き渡り、JJSの一日がスタートする。子供たちは、とても素直で明るい。

授業中は、とても静かで、とても七百名の子供が活動しているとは思えない。

本校の特色に縦割り活動がある。その代表的な活動が、スクールバスでの登下校で上級生が下級生の世話をし、下級生が上級生を見習ながら生活していることだ。私がJJSに赴任して私が思ったことは、毎日が刺激的でワクワク

海外の教育施設から

南十字星の見える

ジャカルタ日本人学校

北根 晃一 (S61・3卒)



ク感があり、子供たちにとっては、学びの場であるだけでなく、オアシスでもあり貴重な場となっているということである。子供たちは、学校が大好きだ。私は、共に学べるこの時間を大切にしたいと思っている。日本にいる若い先生には、ぜひ日本を外から見てほしいと思う。シニアになろうという先生には、まだまだあなたの力を必要としている子供たちがいることを知ってほしい。

これを書きながらこれからも南十字星がよく見えるジャカルタで頑張ろうと思います。

本校のホームページに学校紹介のインスタグラムがあります。その中の代表的な二つのQRコードをご覧ください。

今後ともご支援とご協力をお願い致します。

致します。



卒業生の動向

近年の

教員養成支援事業
学部と同窓会との連携で成果

- 多くの学生が教員を目指してほしい。
- 教員採用選考試験で合格率を上げたい。
- 即戦力として学校で勤務する学生を育成したい。

主に、右記の三点を目指して取り組んでいる教員養成支援事業(千葉大学教師みらい塾)は成果を上げている。

一点目は、新規事業の教育実践演習講座の成果。一年生の必修で行われ、現場の教員を招聘し、具体的事例を紹介しながら学生の意識の向上を図っている。

二点目は、相談事業の成果。相談員を五名から八名に増員、相談室を一教室から四教室に増やし、相談事業の充実に努めている。

相談件数は、選考試験受験者の八十五パーセントに伸び、相談者の九十パーセントが合格している。

卒業後の進路状況(最近5年間)

		令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
教 員	公 立 小	107	121	121	109	103
	公 立 中	37	46	43	42	46
	公 立 高	13	15	21	16	11
	その他の学校	30	26	23	21	29
教 員 外		167	152	136	137	147
進 学		29	35	35	29	33
未就職者		20	29	22	21	20
合 計		403	424	401	375	389

調査時期：令和5年度は令和6年5月1日現在、他年度の調査時期は翌年度の9月30日

三点目は、合格者を対象にした新規事業のフォローアップ講座の開設。四月から勤務する不安を払拭し、即戦力として活躍できる学生を育成する講座を行っている。令和四年の教育学部創立百五十周年を機に計画されたこの事業は、着実に成果を上げている。

令和六年度
定期総会の概要

令和六年度の定期総会が八月二十四日に開催され、議案は全て原案のとおり可決された。総会・功労者表彰・永年勤続者表彰式の後、細晃子氏による講演と歌の披露が行われた。



右：細 晃子氏（講師）
左：久保祥子氏（ピアノ演奏）



総会の様子

冒頭、八木会長は挨拶で、教員養成支援活動の成果、支部活動の充実、新支部設置について述べた。永年勤続者表彰代表謝辞では、大リーグの菊池雄星投手を小学校四・五・六年と担任した芳賀一郎氏の経験談に参加者も興味津々。「私と音楽」の演題で細氏は感動的な歌を六曲披露。アンコールが出るほど大盛況だった。

令和6年度 功労者・永年勤続者表彰（令和6年8月24日現在）

（敬称略）

令和6年度 功労者表彰

原 良三（常任理事11年、支部長11年）
三瓶 繁男（常任理事9年）
徳永 馨（支部役員15年）



令和6年度 永年勤続者表彰

※調査により、御本人から掲載許可を得た方を紹介します。

◇支部関係

★千葉市支部

甲斐 安弘
村上裕美子
清水 研一
楠瀬 千夏

★市原市支部

森 修

★習志野市支部

神谷 亜紀
井上 聡子
阿部 真一

★八千代市支部

北出 英樹
柴田 曉江
丸田 峰登

★船橋市支部

五十嵐信昭
萩谷 高史
小金井紀子

★市川市支部

植田恵津子
片岡 玲子
河部 純
河上真也子

★松戸市支部

長野ゆかり
小林 幸一

★柏市支部

大塚 志乃
小川 敏明
櫻村 雅子

★流山市支部

長谷川伸一

★印旛地方支部

池田 真一
塚本 武
大岩由美子

★香取地方支部

椎名 初美
高橋 真理
石川 弘幸

★山武地方支部

川崎 宏薫
佐瀬 雅彦
和田 賢市

小関 正彦
山桐 吉之

★長生地方支部

井上 真弓
酒井 昌史

★夷隅地方支部

田中 憲生
軽込 貫一

★安房地方支部

川名 厚

★木更津市支部

鈴木 智夫
弘中 邦典
菊地 定勝

★君津市支部

西山 宜孝

★東京都支部

福沢 俊之
長塚 陽子
小泉 重雄

◇都道府県関係

★千葉県

井上 靖
高浦 等
桑原 逸郎
西村 京子

竹澤 英樹

規代 惣一
平川 和也

★千葉県

宮内 恵
鎌形 初恵
黒川 敦子

★茨城県

高津戸 靖

★栃木県

三輪 一夫
増田 忠廣
大野 由香

★群馬県

澤畑 正
神保 康紀
齋藤 亮一

★埼玉県

長谷川 洋
山田 直子
相原 園子

★東京都

飯塚 由梨
関根 光男
大竹千登勢
大田黒恵美

芳賀 裕子

★山形県
井上 賢一

★福島県

松本 聡
真鍋 尚人

★茨城県

高津戸 靖

★栃木県

三輪 一夫
増田 忠廣
大野 由香

★群馬県

澤畑 正
神保 康紀
齋藤 亮一

★埼玉県

長谷川 洋
山田 直子
相原 園子

★東京都

飯塚 由梨
関根 光男
大竹千登勢
大田黒恵美

細村 文子

渡邊 美加
★神奈川県

★神奈川県

萩原 規彦
師 澄江
小野瀬倫也

★福井県

岩井 則子

★長野県

林 忍
新堀 正樹
町田 久枝

★静岡県

田中 昭道
井出恵美子
庭田 陽子

★静岡県

掲載者 105名
非掲載者 16名
合計 121名

令和6年度 経常費会計予算

収入の部					備 考
科 目	5年度予算(A)	4年度予算(B)	増 減(A-B)		
繰越金	201,880	277,673	△ 75,793		5年度からの経常費繰越金
経常費預金利息	10	10	0		経常費普通預金利息
寄付金	1,000	1,000	0		
雑収入	1,000	1,000	0		
基本金よりの受入	6,250,000	5,550,000	700,000		
計	6,453,890	5,829,683	624,207		
支出の部					備 考
科 目	5年度予算(A)	4年度予算(B)	増 減(A-B)		
1. 事務費	1,960,000	1,510,000	450,000		
1) 消耗品費	70,000	70,000	0		用紙代、文房具代、封筒印刷代等
2) 通信費	160,000	140,000	20,000		支部等への通信費、会議案内通信費
3) 事務局経費	1,400,000	1,272,000	128,000		2名体制 事務局長、事務局次長、事務室用新規パソコン購入費
4) 雑費	330,000	28,000	302,000		
2. 会議費	804,000	784,000	20,000		
1) 総会費	450,000	430,000	20,000		印刷費、宛名出力代、講師謝礼
2) 理事会費	150,000	150,000	0		
3) 常任理事会費	80,000	84,000	△ 4,000		
4) 学内理事会費	5,000	10,000	△ 5,000		会議費、旅費
5) 役員会費	60,000	70,000	△ 10,000		会議費、旅費
6) 特別委員会費	54,000	30,000	24,000		会議費（監査・役員選考委員会）、旅費
7) 専門委員会費	5,000	10,000	△ 5,000		会議費（総務・学内・広報）、旅費
3. 事業費	3,456,000	3,316,000	140,000		
1) 会報発行費	1,050,000	1,050,000	0		会報印刷費、編集委員会旅費・会議費
2) ホームページ更新費	176,000	176,000	0		
3) 記念品費	1,500,000	1,400,000	100,000		卒業記念品、永年勤続記念品等
4) 支部活動助成・支部総会参加旅費等	555,000	555,000	0		支部活動助成、支部総会参加旅費等
5) 慶弔費	110,000	60,000	50,000		退職教授送別、生花代
6) 渉外費	65,000	75,000	△ 10,000		大学・関係機関との懇談会、会長行動費
4. 分担金	176,000	176,000	0		教育奉仕花代、千葉大校友会分担金
5. 予備費	57,890	43,683	14,207		
計	6,453,890	5,829,683	624,207		

受賞者
からの
メッセー

同窓会との出会い

原 良 三
(S 39・3卒 千葉市)

令和六年八月二十四日、教育学部同窓会の場において「功労賞」という私にとっては、身に余る賞状を戴き、正に青天の霹靂の感、夢のまた夢の思いです。思い起こせば、この出会いの発端は、平成八年度の人事異動で、新宿小学校に赴任した次の日に、元新宿小学校長、宍倉芳衛先生の訪問を受けました。

「千葉大学教育学部同窓会千葉市支部の総会を立ち上げたいので役員になってほしい」とのこと。この言葉は忘れないものでした。若気の至り、二つ返事で役員を引き受けました。これが同窓会との出会いでした。役員の方々も壮々たる方々、多くの出会いがありました。

組織も具体的に改善され、役職も決定し、平成十一年八月二十三日に、青雲閣で記念すべき第一回千葉市支部の総会を開催、会員七十三名の参加者でした。

初秋を思わせる涼しい風が部屋を吹き抜け、静かな秋の日の開催でした。

千葉大が心の故郷ならば、私にとって、本部、支部の同窓会は第二の心の故郷です。

祝 コロナ禍での
百五十周年事業の達成三 瓶 繁 男
(S 46・3卒)

功労者とのことです。功労に値するものがない。強いて上げればこの稿にふさわしくありませんが、大学三年、学園紛争激しき時でした。

教養学部六号館が全共闘によって封鎖され、当時の体育会設立準備委員会は学内を正常化するべく封鎖解除の集会を持ちました。そこで役員だった私はアジ演説をすることになり、集会は盛り上がり、流れて六号館までデモを行いました。シユプレヒコールをあげているとき二人が六号館に入って行きました。中には誰も居らず、屋上に行つて旗を下ろし、その後全共闘は隊列を組んで帰ってきて、小競り合いはありました。我が我々の抵抗で退きました。その日はまた封鎖されないように六号館に泊まり、結果的に封鎖を解除したことになります。

教育学部創立百五十周年事業のコロナ禍での実施は平常時より何倍も困難だったでしょう。それを実施したのだから同窓会にそれだけの力があり、中でも町田義昭先生をはじめ事務局の皆様のご苦労は大変なものであったでしょう。心より御慰労申し上げます。

歌う楽しさ
演奏する楽しさ徳 永 馨
(S 34・3卒 千葉市)

私は昭和二十一年四月に「千葉師範学校男子部附属小学校」に転入しました。この時点で大学との縁ができました。平成十年三月大森小学校を定年退職するまでの三十六年間ずっと千葉大とのかかわりが続いています。

同窓会役員として先輩方とのつながりを持つことができました。音楽教育の面で多くの先輩諸先生方とかかわりを持つことができました。中でもいちばんの思い出は小川平八先生との御縁です。附属小でピアノを習い、教育実習でもお世話になり、私が退職した大森小でも先輩校長でした。

こうした音楽生活の中でピアノ以外にアコーディオンにも興味を持ちました。ピアノやオルガンとは違い、コンパクトでどこでも演奏ができるすばらしさに魅力を感じました。同窓会役員になってからも、総会の最後に千葉大学歌をアコの伴奏で皆で歌います。これからの微力ながら伴奏を続けたいと思います。

縁を感じた高大連携協定

伊 藤 政 利
(S 61・3卒)

この度、母校同窓会より永年勤続者表彰をいただき大変うれしく思うとともに、お世話になった皆様に対し感謝の気持ちでいっぱいです。

教職は天職と、最後まで思うことができた三十八年間の幸せな教員生活から、今回は縁を感じた二つの出来事について記載します。

一つ目は、本県で開催された「ゆめ半島千葉国体・千葉大会」の準備事業と、東京オリンピックパラリンピックに向けた本県ゆかりの選手への強化支援事業、この二つの業務を行政職として担当したことです。保健体育科の教員である私にとって、この二つの大きなスポーツイベントに関わる仕事ができただことは、幸運でありその後の教員生活の大きな力となりました。

二つ目は、成東高校校長時代に、「教員基礎コース」設置が決まり、千葉大学教育学部と高大連携協定を締結したことです。教職の最後に、母校と教員養成に関わる仕事ができただことに、運命的な縁のような特別な思いを感じました。

母校と同窓会のますますの発展を祈念します。

事・務・局・よ・り

令和六年度の千葉大学教育学部同窓会の役員を紹介します。

令和6年度 千葉大学教育学部同窓会 役員・支部長・支部事務局長・学内理事

役員・理事・顧問			支部長・支部事務局長						学内 理 事					
役 名	氏 名	卒年	No.	支部名	支部長	卒年	事務局長	卒年	役 名	氏 名	所 属			
会 長	八木 雅之	44	1	千葉市	※穴倉 喜巳	49	君島 啓徳	H10	学内理事長	笠井 孝久	千葉大学			
副会長	重栖 聡司	52	2	市 原 市	※鎌田 正男	50	田中 孝一	53	会 報	笠井 孝久	千葉大学			
	古山 文夫	48	3	習志野市	松本 健志	57	近藤 篤史	H3	庶 務	佐久間淳一	千葉大学附属中学校			
	岡村 太郎	47	4	八千代市	越川多佳美	H1	和崎 育代	H17		川名 隆行	千葉大学附属中学校			
監 事	野内 修	45	5	船 橋 市	※高橋 秀充	43	河上 俊和	62		吉田 悠人	千葉大学附属小学校			
	中田 麗子	46	6	市 川 市	西 博孝	50	秋吉 智之	H18		萩原 航平	千葉大学附属小学校			
	栗原 春江	49	7	松 戸 市	井上四志郎	56	保坂 和志	63		小林 直実	千葉大学附属幼稚園			
理 事	※笠井 孝久	H1	8	柏 市	大森 俊生	49	小林 和俊	56		校 友 会	寛方 良輔	千葉大学附属特別支援学校		
	※佐藤洋一郎	46	9	野 田 市	中澤 清人	H2	村田 弘信	H2	小橋 暁子		千葉大学			
	※吉田 進	50	10	流 山 市	鎌木 宏紀	H2	弘永修二郎	H3	大瀧 竜午	千葉大学				
	※濱井 清之	52	11	我孫子市	佐々木祐子	H3	中野 直美	H3	同期会支部					
	飯塚 徳政	48	12	鎌ヶ谷市	柳 昌孝	63	山田 翔太	H23	No.	支部名	支部長	卒年	事務局長	卒年
	石川 和之	53	13	印旛地方	鈴木 弘之	59	山下 博樹	63	1	第 6 期	鶴岡 正	33	小高 博昌	33
	森島 弘道	H2	14	香取地方	武田夕起夫	54	山本 一利	58	2	第 11 期	長野 靖	38	荻山 清志	38
	釜井かつ子	52	15	銚子市	房州 洋一	45	吉野 和宏	62	3	第 13 期	※川崎 正信	40	松崎 清	40
	藤谷 誠	58	16	旭 市	堀井 和夫	47	島海 悟	H11	4	Eb3(73-82)	小椋 栄一	52	大村 尚	55
	向野 光	56	17	匝瑳地方	平山 孝雄	52	貝津 亮	H5	事 務 局					
顧 問	富田 浩明	61	18	山武地方	工川 洋	50	後藤 泰治	H5	※印は常任理事 ゴシック体は新規					
	藤井 俊夫		19	長生地方	高仲 輝夫	50	酒井 政則	56	役 名	氏 名	卒年			
	山中 齊	35	20	夷隅地方	押垂 義郎	48	野口 宏	57	事務局長	※水野 平吾	51			
	貫井 正納	40	21	安房地方	安田 淳	63	渡邊 毅之	H5	事務局次長	※大村 尚	55			
	町田 義昭	41	22	木更津市	三上 勝彦	40	米澤 雅史	56	千葉大学教育学部同窓会事務局 ◇住 所 〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学教育学部内 TEL・FAX 043-290-2596 c-ed-dousou@ sand.ocn.ne.jp					
			23	君津市	川上 清	50	朝生 敦	52						
			24	富津市	牧田 正彦	56	三田 彰一	58						
			25	袖ヶ浦市	伊藤 鉄夫	38	伊藤 鉄夫	38						
			26	東京都	竹中 将隆	40	清水 一豊	46						

物故会員 〈謹んで御冥福をお祈り申し上げます。御遺族から掲載の承諾をいただいています。〉 ()内は卒業年(昭和)(敬称略)

市原市支部	印旛地方支部	旭市支部	夷隅地方支部	木更津市支部	第6期生
落合 郁利 (32)	大木 鶴美 (31)	須川 彰 (25)	末吉 久治 (22)	竹内 秀夫 (26)	大久保明夫 (33)
市川市支部	香取地方支部	中西 忠 (27)	大地 和俊 (25)	市東 宏 (31)	
梶 敏雄 (24)	高柳喜久江 (29)	田邊 哲也 (35)	安房地方支部	東條 章夫 (31)	
酒井 穂子 (32)	齋木 エツ (24)	匝瑳地方支部	今宮 靖雄 (25)	古谷 鐵男 (33)	
松戸市支部	萩原 英樹 (H5)	山崎 安子 (31)	小宮 英雄 (39)	君津市支部	
町山 晃司 (31)				能星 晃 (36)	

編★集★後★記

パリ二〇二四オリンピック・パラリンピックが開催された。各国の選手や関係者の努力と気力にエールを送りながらも、紛争・爆撃・貧困等の昨今の世界情勢には胸を痛める。▼本号の同窓会報も八木会長が巻頭言で「広報活動の充実」を述べているとおり、うれくなるほど読み応えがある。▼特別寄稿の阿部秀夫氏の『夢を目標、そして現実』というエネルギーシユな姿勢と行動力に感銘を受けている。さすが、オリンピックに貢献された方だ。

▼また、執筆者の皆さんの現在実践されている事柄や取り組みに充実した日々が想像できる。「私の学園生活」「受賞者からのメッセージ」からは、正に歴史を感じ、初めて知ることとあった。同時代の同窓生には、懐かしさ、当時のことがありありと目に浮かぶことだろう。▼ところで、前号では、六・七ページにQRコードを初めて載せたが、早速反響があった。「オペラ歌手細見子さんの美しい歌声を居ながらにして、聴くことができた」と、IT化の現在に感心しきり。七ページには、千葉大学歌も聴けるようになっていた。本号九ページのQRコードからは、ジャカルタ日本学校を紹介していますので、どうぞ。(文責 宮葉 清子)